

令和元年6月24日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04208

研究課題名(和文) 日本民間教育研究運動で形成された教育学の知の解明 授業実践1次資料の活用

研究課題名(英文) The Knowledge of Pedagogy Produced by Agents of Japanese Non-Official Educational Movement

研究代表者

本田 伊克 (Honda, Yoshikatsu)

宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授

研究者番号：50610565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：戦後民間教育研究団体が発行している機関誌などの分析と、教育実践に関する1次資料をもとに、1970、80年代の教育研究運動と教育実践を通して教育に関するどのような性格の知が生み出されたのかを明らかにした。

各教科・領域の戦後民間教育研究団体は、受験競争の激化に伴う学力序列の特権化によって詰め込み主義の授業が横行し、子どもたちの学習意欲が奪われていった1970年代以降、教育内容・方法研究の方向性を見失っていた。1970、80年代には学習への忌避を打開する教育実践が展開され、戦後民間教育研究団体はこれらに着目し、教育実践で生じる事実を通じて教育内容・方法と子どもの認識発達に迫ろうとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は、1970、80年代における民間の教育研究運動が、教育実践の営みとその過程で生み出された事実に着目し、新しい教育学の知のかたちを模索していった過程を、教育実践の1次資料の検討を通じて明らかにしているところに学術的な意義がある。

また、研究の過程で蓄積した教育実践の1次資料、とくに、当時の子どもたちの学びの様子を知ることができる資料を蓄積し、整理し、アーカイブ化してさらなる研究への利用可能性を開いた点で、これからの教育研究に寄与するものでもある。

研究成果の概要(英文)： We made clear the feature of the knowledge in pedagogy in 1970s and 1980s by analyzing magazines of post-war public educational research organizations.(1)In 1970s and 1980s, these organizations lost sight of the direction in researches of educational contents and methods. Students are deprived of their learning motivation, enforced the cramming system of education. Japanese public educational research movement found no resolution of these educational problems.(2)Japanese educational research organization paid attention to the facts of educational practices, and tried to approach how students developed their academic thoughts.

研究分野：戦後民間教育研究運動史

キーワード：戦後民間教育研究運動 教育学の知 数学教育協議会 仲本正夫 船戸咲子 巨摩中学校 教育実践アーカイブ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後の民間教育研究運動史については一定の学術研究の積み上げがある。とりわけ、1950、60年代については、各教科・領域の民間教育研究団体が、最先端の学問の知見を取り込んだ子どもの認識発達の研究とそれに基づく教育内容・方法の創出を行ったこと、同時に、当時の教育実践との関係では、想定された教育内容・教材の系列を子どもの認識発達の過程と同一視してしまうなどの問題も抱えていたことが明らかになっている。

これに対して、1970、80年代の民間教育研究運動については、教育における競争主義と序列化の進行によって子どもの認識発達の危機と学びからの阻害が生じ、1960年代までの研究の方向性では教育実践を切り拓く内容・方法を明らかにできなくなっていたことは指摘されている。

(2) だが、当時の民間教育研究運動が、世の注目を浴びた特定の教師、あるいは学校の教育実践に着目し、そこから自らの教育研究運動の方向性を見出そうとした事実と、これらの教育実践に活路を見出だそうとした結果として何が明らかとなり、何が未解明のままであったのかは明らかにされていない。

また、1970、80年代の民間教育研究運動が注目した教育実践については、それを担った教師・学校、なにより当時の子どもの学びの実態を示す資料に基づく検証は不十分であった。

2. 研究の目的

1960年代から1980年代を射程に、戦後民間教育研究団体による教育研究・運動が学校現場での教育実践にどのような影響を及ぼしたか。もう一方で、各学校の教育実践で生じた問題や課題を民間教育研究運動がどのように引き取り、教育に関していかなる理論的・実践的な知を形成していったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 戦後民間教育研究団体が発行している機関紙を中心に、1960年代から1980年代の民間教育研究団体と教育実践との関連と、民間教育研究団体が生み出した教育の知の性格に関する仮説を組み立て、インタビューとフィールドワーク調査の枠組みを形成する。

(2) 大学の研究者と教師との共同的な授業研究の成果として蓄積された「授業実践アーカイブ」を活用し、(1)で形成した仮説と照合する。

(3) フィールドワークを通して、とくに1970年代から1980年代の教育実践に関する1次資料を収集し、アーカイブ化する。

(4) 収集した1次資料を分析し、1960年代から1980年代にかけて生み出された教育の知の性格がいかなるものであったかを解明する。

4. 研究成果

まず、本研究の成果を総括的に示す。本研究では、1950年代から1980年代の日本における、教育及び教科に関わる学問分野の研究者と教師たちの共同による「実践を通じた研究、研究を通じた実践」を通じた民間教育研究運動が生み出した教育学の知の特質を解明した。

(1) 大きく捉えれば、1950、60年代と1970、80年代において、民間教育研究運動と各学校で展開された教育実践との関係は変化し、それに伴って民間教育研究が生み出す教育学の地の性格も変化していく。

1950、60年代は、各教科の民間教育研究団体が、国(文部省)による教育内容統制に対抗して、独自の教育内容を創出し、それが各地の教育実践において試されるという関係にあった。この時期には、こうした教育内容を子どもが身につけていく過程を認識のカテゴリー系列でとらえ、教育実践の過程を可視化しようとする傾向が強かった。さらに、子どもがこうした教育内容を順次学んでいけば、産業構造の変化と能力主義的な序列化を迎えた社会を変革していく力が培われると想定されていた。

だが、そうした予想は1960年代末頃からはっきりと裏切られ、偏差値に換算される学力・学歴(学校歴)序列が支配的になるなかで、子どもは受験に特化した学習を強いられ、傷つき、学習を忌避する傾向も顕在化していった。

(2) こうした状況が広まった1970年代、80年代、民間教育研究団体は各教科の教育研究の方向性を見失っていく。この時期には、学力・学歴序列に抗い、科学・文化をすべての子どものものにするに挑む教育実践が教師や学校によって展開された。民間教育研究団体はむしろこうした教育実践に教育研究の糸口を見出そうとした。

こうして、すべての子どもに学ばせるべき科学・文化の内実と様式と、教育実践における教師と子ども間の知の伝達-獲得のあり方を同時に変革しようとする中で、民間教育研究運動はその方向性を見出そうとした。その過程で、民間教育研究運動が着目した教師・学校における教育実践の担い手自身も、自らの教育実践のもつ意義を認識し始める。

(3) 1950年代には、民主化の進展と貧困の克服にむけて、生活の困難を切り拓く学力が求められた。民間教育運動は、生活の根を豊かにする生活綴方教育を追求する方向性と、数学教育協

議会（数教協）を中心に、科学的根拠に基づく子どもの認識発達過程の解明を通じた教科の系統性を追求する方向性をもって展開していた。

さらに、授業のなかで捉えられた子どもの事実に即した「教授学」を追求する流れもあった。斎藤喜博が校長を務めていた群馬県島小学校では、船戸咲子ら若手の教師が子どものまちがいのなかにもその子どもなりの思考過程の法則性や論理性を見出し、学級集団のなかでみながより広く深い理解に至るような授業実践と、それを可能にする教師集団づくりに取り組んでいた。

(4) 1960年代になると、産業構造の大転換と都市部への人口移動など人口動態の変化によって生活の基盤が激変するなか、こうした社会に適応し、さらに変革していくための科学的認識の質の向上が教育の課題になる。

この時期は、数学教育協議会（数教協）や科学教育研究協議会（科教協）など、教科に関わる専門的領域の研究者と教師から構成された民間教育研究団体が各教科の教育内容・方法の研究を主導し、現場での教育実践を通して研究成果が実証されるという関係にあった。

このほかに、教科の単なる内容・教材研究によっても、子どもの科学的認識過程の解明によってもカバーできない、創造的な授業の創出過程自体を明らかにしようとする教授学のアプローチに基づく方向性も1950年代に引き続き追求されていた。

(5) 1970年代になると、民間教育研究団体は、学力・学歴序列が支配する競争の教育のなかで学習を忌避する子どもの実態に直面し、1960年代までの教科教育研究の方向性は行き詰まりをみせていた。

こうして、1970年代以降、数学教育協議会なども民間教育研究団体は、こうした事態を切り拓く試みとして注目された教育実践に手掛かりを見出そうとした。

1970年代から1990年代初等にかけて、埼玉県山村女子高等学校における仲本正夫氏による数学教育実践には、数学教育協議会や教育科学研究会も着目した。

そして、山梨県巨摩中学校における合唱を中心とした表現を軸にし、学力序列を変革しようとした自主的・創造的な教育課程づくりと教育実践も、当時の民間教育研究運動に大きな影響を与えた。

(6) こうして、教育実践と教育研究運動の関係性において生じた変化は、その過程で形成された教育学の知の性格にも変化を与えた。

1970、80年代の民間教育研究運動は、子どもに伝えるべき科学・文化の内容そのものを問い直しながら、それと教育とをどう結びつけるかという方向性を、教育実践の事実から見出していこうとした。

さらに、たとえば理科教育において、子どもが教材と相互作用してどのような分かり方をするのかを研究する方式として極地方式が打ち出され、1960年代までのように、生み出された教育内容の系列を教育実践に適用するのではなく、教育実践のなかから理科なら理科の概念や法則の子ども自身による行きつ戻りつの過程を辿るつかまればかたを、研究者や教師自身もジグザグの試行錯誤を経ながら追求していこうとする方向性も打ち出されていった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計14件)

本田 伊克、わたしたちの「教科論」へ 意味の空洞化を超えて、教育、教育科学研究会編、査読無、878号、2019、pp.5-13

本田 伊克、＜発達＞概念をいま、どのように問うべきか、宮城教育大学紀要、査読無、53巻、pp.297-308

吉村 敏之、船戸咲子の授業の展開を支えた教材解釈、宮城教育大学紀要、査読無、53巻、2019、pp.341-347

本田 伊克、子どもの学びを阻むもの、ひらくもの、教育、教育科学研究会編、査読無、871号、2018、pp.36-43

本田 伊克、「教授学」の再生をめざして、教育、教育科学研究会編、査読無、869号、2018、pp.43-51

本田 伊克、算数科における子どもの学びの障害、宮城教育大学教職大学院研究室紀要、査読無、1巻、2018、pp.122-128

吉村 敏之、船戸咲子学級における「深い学び」 学習集団による解釈の深化、宮城教育大学紀要、査読無、52巻、2018、pp.349-356

本田 伊克、改訂学習指導要領の性格分析 私たちの教育課程づくりをめざして、教育、教育科学研究会編、査読無、859号、2017、pp.15-21

本田 伊克、創造的な教育実践への「第一歩」、教育、教育科学研究会編、査読無、857号、2017、pp.86-88

本田 伊克、「教育の良心」を引き継ぐために、教育、教育科学研究会編、査読無、856号、2017、pp.30-33

吉村 敏之、船戸咲子による学習集団の組織 「独自学習」の充実、宮城教育大学紀要、査読無、51巻、2017、pp.209-216

吉村 敏之、個が育つ学習集団の組織 船戸咲子の実践、宮城教育大学紀要、査読無、50
巻、2016、pp.305-315
吉村 敏之、子どもを見る・子どもが見える 船戸咲子さんの事実、教育美術、査読無、
885号、2016、pp.26-29
本田 伊克、『戦後日本の教育と教育学』を読む、教育、教育科学研究会編、査読無、832号、
2015、pp.106-109

〔学会発表〕(計9件)

本田 伊克、教授学をいかに継承し創造するか、日本教育学会第77回大会(宮城教育大
学) 2018年
本田 伊克、学校と教室の日常から教育課程をたちあげる、教育科学研究会第57回大会
(法政第二中高等学校) 2018年
本田 伊克、私たちの教育課程づくりを考える、教育科学研究会3月集会(ヴォーリス学
園) 2017年
吉村 敏之、船戸咲子による学級の組織 「さかえちゃん式まちがい」の生まれた集団、
日本教育学会第76回大会(桜美林大学) 2017年
吉村 敏之、授業を記録すること 方法と意義(ラウンドテーブル)、日本教育学会第75
回大会(北海道大学) 2016年
吉村 敏之、学習集団の組織過程 船戸咲子の授業、日本教育学会第75回大会(北海道大
学) 2016年
本田 伊克、岐路に立つ地域と学校、教育科学研究会第54回全国大会(松本大学) 2015
年
吉村 敏之、実践を記録することによる教師の成長 群馬県玉村小学校『草原』、日本教育
方法学会第51回大会(岩手大学) 2015年
吉村 敏之、学びの質を考える 授業の組織(ラウンドテーブル)、日本教育学会第74回
大会(お茶の水女子大学) 2015年

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：吉村 敏之

ローマ字氏名：Yoshimura Toshiyuki

所属研究機関名：宮城教育大学

部局名：教育学研究科(研究院)

職名：教授

研究者番号(8桁): 80261642

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。